# 山のトイレ協議会通信

第21号

高千穂峰携帯トイレ利用状況視察（photo by Sakai）

目　次

平成30年度総会及び講演会報告　2
高千穂峰携帯トイレ利用状況視察山行報告　4

山のトイレ・環境を考える福岡協議会

1　平成３０年度総会報告

平成30年度山のトイレ･環境を考える福岡協議会第10回定期総会及び講演会が平成30年7月8日（日）13時から福岡市立中央市民センターで開催されました。

議長に酒匂輝昌氏が選出され、活動報告、30年度活動計画、会計報告、30年度会計予算、会計監査報告、運営委員会開催報告があり、これらについて質疑応答の後、役員改正がなされ、議案は全て出席者全員の承認を得て成立しました。ただし、質疑応答の中で6月以降に行われた夏山フェスタの報告については、当会の会計年度が6月1日～翌年5月31日であることから、来年度の総会で再報告することになりました。

2　尾登憲治氏の講演　「ナイロンザイル事件」上映

1955年、前穂高岳東壁を登攀中の学生が、切れないとされていた新品のナイロンザイルが切れ、亡くなった。亡くなった若山五郎の兄である石岡繁雄は、その原因が登山者のミスによるものではなく、ナイロンザイルが鋭角の岩角にかかると、簡単に切れてしまうことを実験により突き止めた。一方、ナイロンザイルを製造した企業等は、この事実を認めず、公開実験と称し、ナイロンザイルが切れないよう岩角に丸みをつける細工をし、ナイロンザイルが切れないことを示した。石岡はこれに対し、使用する登山者の安全を守るためナイロンザイルは岩角で切れることを20年間に渡って社会に訴え続け、社会が認めることになり、これがPL法の制定につながる。この間、２０人を超える尊い命が失われた。

ナイロンザイル事件とは、この20年に及ぶ石岡繁雄の執念とも言うべき苦闘の戦いであり、井上靖の小説「氷壁」はこのナイロンザイル事件の初期段階を題材にした作品である。上映された作品は尾登氏が石岡の娘さんへの証言インタービューを通して「ナイロンザイル事件」の真相に迫った映像作品である。

3　栗秋正寿氏の講演　「アラスカ　垂直と水平の旅」

(1) プロフィール

栗秋氏の登山の始まりは、15歳の時、北アルプスを舞台にした映画に感動し、修猷館高校の山岳部に入る。高校時代は北アルプスを目標にトレーニングのため50kg以上の荷を担ぎ、三郡縦走を何度もされたり、日常も60kgを超える荷を担いで高校の階段上り下りされていたという。九州工業大学でも山岳部で活動されていたが、20歳の時バイクをいじっていて指を切断され、普通の技術者として生きるよりも大好きな山登りに人生をかけることになったという。1955年7月、大学4年の時、山岳部の後輩と二人で北米大陸の最高峰マッキンリー(6,194m;現在名デナリ)に登頂され、その後は単独でアラスカ山脈三山のマッキンリー,フォレイカー（5,304m)、ハンター(4,442m)に挑むことになる。1988年2月ついに冬季マッキンリー単独登頂（世界で4人目、史上最年少）に成功す

る。続いて 2007 年 3 月冬季フォレイカー単独登頂（冬季単独は世界初）に成功する。残る冬季ハンターの登頂は 9 回挑戦するも実現できていない。

今も冬季アラスカ山脈登山の第一人者、栗秋正寿氏の挑戦は続いている。

(2) 垂直の旅

垂直の旅とは栗秋氏のマッキンリー、フォレイカー、そしてハンター（アラスカ山脈三山）への冬季単独登山の挑戦の物語である。

講演の中で冬季単独登山の方法を次のように述べられている。日本の四国以上の広さがあるデナリ国立公園の中には栗秋氏一人しか入山記録がない年もある中を単独で登るには、まず荷を担がないでラッセルを行い、引き返して 150 kg以上の食料やギア等の荷を小分けし、5 時間ほど進んでは 4 時間ほどかけて雪洞を掘り、荷物をデポすると元いた地点まで引き返し、残りの荷を運び上げ、これを 4～5 回ほど繰り返し、次の地点まで同じように繰り返し、進むやり方である。もちろん、悪天候の中では雪洞の中で天候が回復するのを待つという。時にはそれが 1～2 週間続くこともある。こういった極限の世界での栗秋氏の登山スタイルは、生還を第一に考え、決して無理はしない、十分に余力を持って行動することだという。そして凍傷対策としても有効なのが、日焼け止めクリームを露出する顔にたっぷり塗ることと同時に朝、昼、夕そして夜食としてとにかく食べ、1 日に 4000～4500 ｶﾛﾘｰのエネルギーを得ることだという。このような日々が 2～3 ヶ月続く。そんな孤独とも言うべき日々も栗秋氏にとっては楽しく、吹き荒れる風雪の中、雪洞に入り、川柳を作ったり、ハーモニカを吹いて過ごすという。

(3) 水平の旅

水平の旅とは、冬季マッキンレー単独登頂を成し遂げ、下山後、アンカレッジから北極海まで 2,400 kmをリヤカーを引いて歩いた旅である。この旅は垂直の旅とは異なり、冬季マッキンリー単独登頂を成し遂げた日本人が帰国せず、北極海を目指して国道を歩いていることは地元でも話題になっていたため、行き交う車に乗ってい

る人々から声を掛けられ、地元の人々との交流の旅となった。小さな村の学校に講師として招かれたり、地元の人に頼まれ郵便物を運ぶ世界一遅い郵便屋さんを務めながら、北極海を望む海岸までの心温まる旅となり、今でもそこで出会った人々との交流が続いているという。

(4) アラスカの山のトイレ事情

夏には多数の登山者がアラスカの山に登るので、降り積もった雪を溶かして水を作るため、衛生上の理由から、小については団体ごとに決められた 1 箇所でする。大については携帯トイレ持参し、使用した携帯トイレやゴミは持ち帰るという規制がある。

4　その他

講演会の後、石岡繁雄氏と親交のあった石原日本山岳会東海支部長の挨拶、尾登氏や貞苅氏の山のトイレ問題について簡単な話があって、平成 30 年度山のトイレ・環境を考える福岡協議会総会及び講演会が終了しました。

## 《高千穂峰携帯トイレ利用状況視察山行報告》

2018 年度の重点目標事業として久住分れトイレ問題の解決策の参考にするため、10 月 27 日（土）～28 日（日）に山のトイレ・環境を考える福岡協議会と日本山岳会東九州支部と合同で高千穂峰携帯トイレ利用状況視察山行を行いました。27 日の登山や交流会に地元の霧島市役所から石川氏、肥後氏、28 日の意見交換会には環境省から高千穂峰の携帯トイレブースや回収ボックスの管理を委託され、現場で実際に携帯トイレブースの清掃や補修といった維持管理の仕事をされているグリーンワーカーの修行氏から詳しい説明及び貴重なご意見をいただきました。

(1) 参加者　28 名

山のトイレ・環境を考える福岡協議会　17 名（男性 12 名、女性 5 名）

日本山岳会東九州支部　8 名（男性 4 名、女性 4 名）

霧島市等　3 名

(2) 行程

10 月 27 日 7 時福岡市天神出発＝（バス）＝11 時 20 分高千穂河原着。日本山岳会東九州支部や霧島市職員（石川氏）と合流し、内 21 名が 12 時 15 分高千穂峰登山（携帯トイレブース視察）に出発。14 時高千穂峰登頂、15 時下山開始、16 時 30 分高千穂河原に下山。宿に移動し夕食後、霧島市職員（肥後氏）も加わり交流会を行う。

28日9時～10時40分、高千穂河原ビジターセンターで意見交換会が行われた。意見交換会では非常に多くの活発な質疑応答が有りました。その後、いったん外に出て、団体登山者用に無料で貸し出してある簡易テント型の携帯トイレブースの見学、最後に締めくくりの挨拶や意見表明が有り、11時30分に今回の高千穂峰携帯トイレ視察山行を終えた。

(3) 高千穂峰携帯トイレ利用状況視察山行を終えて

実際に高千穂峰山頂に設置してある携帯トイレブースや高千穂河原の携帯トイレ回収ボックスを見て、意見交換会の質疑応答で、我々が抱く携帯トイレの利用状況に関する理解が深まり、今後の九州、中でも久住分れのバイオトイレの問題の解決や携帯トイレの普及に向けた方向性が浮かんできたように思える。

久住分れのバイオトイレ問題の解決のため、携帯トイレの優位性を確認し、まずは、トイレを設置、維持管理する環境省や大分県、竹田市等といった行政機関にトイレを利用する登山者として携帯トイレブースや回収ボックス設置の要望を出そう。山のトイレ問題の協議の場に行政や地元観光協会そして自然保護に関心のある団体及びトイレを利用する登山者や山岳団体を引き込もう。もちろん、携帯トイレブースや回収ボックスの設置だけではなく維持管理する体制作りも重要だ。懸案のトイレを利用する人のマナー問題は携帯トイレの使い方を周知させることで徐々に解消していくだろう。この先、携帯トイレの普及においても財源をどうするか、だれが維持管理をしていくかなど多くの問題が浮上していくことだろう。しかし、問題解決のために行動を起こさないことには、物事は進まない。

記　池松和弘

## 山のトイレマナーと環境にやさしい登山を

- 山に入る前には麓のトイレで用を足しましょう
- 山中では設置のトイレで用を足しましょう
- トイレにゴミは捨てないようにしましょう
- 公衆トイレがない山では携帯トイレを使いましょう
- やむを得ず山中(トイレ以外)で排泄する時は
  穴を掘って埋めるなどの処理をしましょう
- 使用済みのペーパーは必ず持ち帰りましょう
- 花を手折ったり、盗掘はやめましょう
- 登山時のゴミは持ち帰りましょう

**会費未納の方へお願い！**

払込書を同封しています。ご協力よろしくお願い致します。

会計より

山のトイレ・環境に関する情報や会員皆様の活動報告、ご意見を募集しています。
原稿の送り先　trek99@chic.ocn.ne.jp 又は下記の九州登山情報センター内まで
山のトイレ・環境を考える福岡協議会
運営委員会事務局(山のトイレ通信担当)　池松和弘

編集後記

親の介護もしなければならない。山歩きをもっと楽しみたい。山のトイレ問題等自然保護の活動もしたい。いろんな思いが交錯し、理想と現実の間で揺らいでいる.栗秋氏が講演の中で「山は逃げないが、時は逃げて行く。」と言われたことが心に響く。(K.I)

山のトイレ協議会通信　第21号
発行日 2018年12月17日
山のトイレ・環境を考える福岡協議会
〒818-0115
太宰府市内山708番地
九州登山情報センター内
☎&FAX　092-928-2729(水・木曜休)